

ディードーの愛し方

—アモルに捕らえられた女の伝説と

その文学的変容について—

川 端 康 雄

Δεινὸς Ἔρως, δεινός.

恐ろしや、恋（エロース）、恐ろしや。

（メレアグロスのエピグラム）

In such a night

Stood Dido with a willow in her hand

Upon the wild sea banks, and waft her love

To come again to Carthage.

こんな夜だった

ディードーが柳の枝を手に

荒れる海の岸に立ち、恋する男に

カルターゴーに戻りたまえと呼び招いたのは。

（シェイクスピア『ヴェニス商人』）

I はじめに

宮沢りえと貴乃花関の婚約が解消されたと報じられた日の夜（だいぶ前の話だが）、貴乃花の特別記者会見の様子がテレビに映し出されているのを見ていたとき、興味深いやりとりが交わされたのを覚えている。群がる芸能リポーターの一人が貴関に「あえて仕事（相撲）を捨てて、りえさんとの愛を貫こうと思わなかったのか」という趣旨の質問をしたのである。矢継ぎ早の質問にただでさえ歯切れの悪かったこのときの貴乃花の返答がこれで一層し

どろもどろになったのだが、恋愛を「貫徹」するために相撲を捨ててしまったこの青年の姿が私たちにしてみても想像しがたいのだから、これは本人にはさぞや困った質問だったろう。

それはともかく、その問いが興味深く感じられたのは、私たちの社会では、「仕事」と「恋愛」が両立しがたい状況が生じた際に前者を犠牲にして後者を取ることをよしとする見方に一定の市民権が与えられている（たとえその逆の見方もまた有力なのであっても）という事実がここに暗示されているように思えたからだった。それがあるので、質問者は真面目な顔で問いただすことができる。「なぜ仕事を捨てて恋愛を取らないのか」と。

この問題は実はすでに百年前にわが国で文学上の論争の種になっていた。それは1890年（明治23年）に発表された森鷗外（1862-1922）の「舞姫」（初出『国民之友』1月号）をめぐる作者と石橋忍月（文芸評論家、1865-1926）との間で交わされた論争（いわゆる「舞姫論争」）である。この短編小説で、官命を受けて法律の勉強のためベルリンに留学した主人公の太田豊太郎は、美しく貧しい舞姫のエリスと出会い、愛し合う。一時は家も立身出世の道もすべて投げ捨ててエリスとの愛に生きようとし、しばらく同棲を続けるが、親友相沢謙吉の計らいもあり、不本意ながら彼は身重のエリスを捨てて帰国することを決める。その意志を知ったエリスは絶望のあまり発狂してしまうが、それでも結局太田は帰国の途につく。「嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裏に一点の彼を憎むこゝろ今日までも残れりけり。」という船上での太田の感慨でこの小説は幕をとじる。

石橋忍月の「舞姫」への批判文が出たのは同年1890年2月、『国民之友』の次号（第72号）においてだった。題名の不適切な点その他、いくつか不審の点を指摘しているが、ここで問題にしたいのは、忍月の次の批判である。曰く、「著者は太田をして恋愛を捨て、功名を取らしめたり、然れども余は彼が応さに功名を捨て、恋愛を取るべきものたることを確信す」⁴⁾。つまり、太田は「功名」（帰国して高級官僚になるという出世コース）を断念してエリスとの恋愛をまっとうすべきであった、と作者鷗外を批判するのである。このあと鷗外の弁明も出されるが、いずれにせよここで、「仕事」か「恋愛」という二者択一が提示されて、後者を取るべきだという考えが述べられている。忍月によれば「恋愛」とは「仕事」に優先されるべき崇高な観念なの

である。

「恋愛」という語に忍月が込めた感情価値はひとり彼だけのものというのではなかった。これを忍月が書いた1890年(明治23年)はまさに「恋愛」という語が流行しだした年であり、多くの論者がこの語を高尚な精神的感情を意味するものとして使っている。比較文学者の柳父章によれば、「恋愛」とは明治時代に西欧の観念を紹介するために導入された一連の翻訳語(社会、個人、近代、自然、自由、彼、彼女等)の一つだという。たしかにそれまで日本にも「恋」や「愛」、「情」や「色」という語はあった。しかし「恋愛」という語はなかった。その語は、明治期に西欧の文芸が日本に紹介されたときに、そこに描かれた、当時の日本人からすれば異質と感じられた観念を表現するために使われた語だったのである⁽²⁾。

ここで「恋愛」という語の現在の語感を押さえておくために、手元の辞書の定義を参照しておく。『新明解国語辞典』(三省堂、第4版)では、「特定の異性に特別の愛情をいだいて、二人だけで一緒に居たい、出来るなら合体したいという気持を持ちながら、それが、常にはかなえられないで、ひどく心を苦しめる・(まれにかなえられて歓喜する)状態」とある。おなじ辞書の「恋」を引くと、まず「恋愛」とあって、両者の語を特に区別していない。しかし、「翻訳語」としての「恋愛」が百年前に流行したときには、「恋」という語が「不潔の連感」^{アソシエーション}に富めるものに対して、「深く魂(ソウル)より愛する」西欧的な「ラブ(love)」という価値が高い感情を意味するものとして使われたのだった。おそらくこの語の初期の用例を集めてみるなら、新明解の定義での「出来るなら合体したいという気持を持ちながら」というのは不適當になるのではないか。男女関係から「低級」とされる肉体的欲望を消去して、「高尚」な精神的、霊的次元のみでの男女の愛を表すために持ち出された語なのであるから。もちろん、1890年代にこの語を情熱的に使った人々のように、「恋愛」が価値が高くて、日本に従来あった「恋」が価値が低いという考え方は今の私たちには共有できぬ考えではあろうが、そうした「魂よりの愛(love)」が舶来の観念として大いに歓迎される精神風土というのが1890年当時の日本に存在したことが私には興味深く思われる。柳父は、『「恋愛」とは「深く魂(ソウル)より愛する」ことだ、という考えには、かなりうなずける所があるように思う』と言って、さらにこう指摘する。

「英語で、love に大変近いことばに、romance がある。romance とは恋物語のことであり、その源は、中世騎士物語である。……はじめに美しい女性がいる。遠くの方から現われる。男は、直ちにそれに近づいていこうとしないで、かえって遠ざかる。しかも生命を賭けた危険の方に向かっていく。男は、冒険の果てに、やがてその美しい存在のもとへ帰ってくるのだが、その love の始まりの形にとくに注目したい。このような物語の背景には、マリア崇拝や、十字軍の遠征がある。つまりキリスト教が根本にある」⁽³⁾。

万葉集をはじめとして、日本の伝統的な「恋」や「愛」が心と肉体を常に切離さず、一つに扱ってきたのと対照的に、こうした中世騎士物語に見られるような、魂と肉体を区別して理解しようという考え方、もの見方がここにある。これが明治 20 年代の日本人には新鮮なものと写ったのであり、その差異を明確にしようという意図があって「恋愛」という語が使用されるに至ったというのが柳父の説である。

とはいえ、こうした恋愛観が西欧にスタティックなものとして普遍的、通時的に存在していたというわけではない。今見た柳父の説明で中世騎士物語が例に出されているのは非常に特徴的なものであって、実はそうした「恋愛」という観念そのものが西欧中世に普及したものにほかならない。これをいわばキャッチフレーズにしたのが、フランスの歴史家シャルル・セニョボス (Charles Seignobos, 1854-1942) の「恋愛は十二世紀の発明だ」という名高い言葉である⁽⁴⁾。「発明」という語が適当であるかどうかは議論の余地があるが、少なくとも文学表現において、十二世紀になって、それまで西欧では一般的でなかった恋愛賛美の主題とする文学作品が、突然奔流のごとく生み出されていったという事実がある。それは特に西欧の古典世界での男女関係についての常識の対極にある見方だった。

これがいかなる変化であったのかを理解するための具体的な材料として、本論ではカルターゴのディードーの物語を取り上げてみたい。

II ディードーの出自

ディードー (Dido) はカルターゴ (Carthago) の伝説の女王の名である。カルターゴというのは紀元前に繁栄した後に滅亡した古代都市で、今

ディードーの愛し方

のチュニジア海岸テュニス近郊にその遺跡が残っている。古代ローマの宿敵にあたる都市で、地中海世界の貿易上の覇権をめぐる両者は争い、三次にわたるポエニ戦争（第一次、前264-241。第二次、前218-201。第三次、前149-146）の果てに結局ローマによって壊滅させられてしまった。ラテン語の文法書によく出てくる例文として“Delenda est Carthago.”（カルターゴは滅ぼされなければならない）というフレーズがあるが、これは大カトー（前234-149）の口ぐせだったとされるもの。実際、これが当時のローマ人のスローガンとなっていたようである。そうした関係を考えてみるなら、一時はローマの存亡の危機をもたらしたライヴァルであるカルターゴの伝説の女王のイメージが定着したのが、ローマの建国神話を歌ったウェルギリウス（Vergilius、前70-前19）の叙事詩『アエネーイス』（*Aeneis*、前19）においてであったというのはアイロニカルであるように思われる。

『オックスフォード古典辞典』（第二版）はディードーを次のように説明している。

ディードー、伝説でテュロス〔フェニキアの港湾都市〕の王（ウェルギリウスによればベールス王という名）の娘。テュロスではエリッサ（*Elissa*）と呼ばれたらしいが、カルターゴではディードー（「放浪者」の意味か）と呼ばれたという。その夫（ウェルギリウスによれば名はシュカエウス）は彼の兄弟のピュグマリオンに殺害された。そのピュグマリオンがテュロス王となったため、ディードーは従者数人とともにリビュアに逃げ、そこにカルターゴを建設した。ここでその伝説にいくつか異説が出てくる。ティーマイオス〔ギリシアの歴史家。『シチリア史』38巻。前356頃-260頃〕が語る比較的古い話では、リビュアの王（ウェルギリウスではイアルバースという名）が求婚してきたので、それを遁れるため、供儀をおこなうように見せかけて火葬壇を築き、その炎のなかに飛び込んで自殺したという。この話がローマ版になるとアエネーアースがカルターゴに赴くという筋書きになるが——これはポエニ戦争の時期に普及し、おそらくそれをナエウィウス〔前270頃-199頃。『ポエニ戦争』によりローマ国民叙事詩の創設者とされる〕とエンニウス〔前239-169。叙事詩『年代記』により「ラテン文学の父」とされる〕が踏

襲したようである——、これを採用したウァロー [前 116-27] では、アエネーアースへの恋心ゆえに滅んでしまうのはディードーその人ではなく、姉妹のアンナだった。『アエネーイス』の第一巻と第四巻に語られる物語はウェルギリウス自身の考案であるのかもしれない。[その叙事詩では] アエネーアースは、リビュア沿岸で難破して、ウェヌスによって宮殿に連れていかれ、ディードーに歓待される。そこでディードーは彼に恋してしまう。しばらくしてアエネーアースは、神メルクリウスからカルターゴを発って使命をまっとうするように警告され、出発する。そしてディードーは火葬壇に身を投げる。オウィディウスは『ヘーローイデス』の第七でディードーの悲嘆を修辭的に述べている。近代の間間はディードーに対するアエネーアースの扱いに感情を害し、言語道断の振る舞いだと罵るのだが、神聖な使命に従って彼女を捨てることは、彼の「敬虔さ (pietas)」の本質的要素なのである⁽⁵⁾。

最後の一文は本論の主題にもかかわることであるが、これについては後にまわし、ひとまずまとめとして、ディードーの伝説が古典ギリシア時代ですであつたが、紀元後の西欧世界に伝わる形でのプロットは紀元前一世紀末のウェルギリウスの叙事詩『アエネーイス』に描かれたものが原型となつたということを押さえておきたい。それでは、その『アエネーイス』においてディードーの愛はどのように描かれているのだろうか。次にそれを見ておきたい。

Ⅲ ウェルギリウスのディードー

叙事詩というジャンルは、国家や民族といった大きな単位の共同体の運命にかかわる事件（それが歴史上の事件であれ、伝説上の事件であれ）において、英雄的な功業を遂げた人物の行動を韻文形式で語る文学作品を意味する。『アエネーイス』の場合はトロイア滅亡後のアエネーアースの国家再建つまりローマ建国の物語である。抒情詩とちがって、このジャンルでは主人公の内的な動機を詳細に分析することはしない。心理に踏み込むことは叙事詩特有の大きな律動感を損なうことになるからである。また、主人公は等身大で

はなく、いわば巨人化されている。人物をリアルに描くことよりも、大きな事件に焦点を合わせることが目的だから、それによって物語が損なわれることはない。私的な事柄（男女の交際など）が公的な事柄（戦争や国家建設）に従属するため、叙事詩は概して恋愛を避ける。叙事詩で扱うには、それはあまりにも個人的すぎる。

ところが『アエネーイス』は十二巻あるうちの一巻（第四巻）まるまるがディードーとアエネーアースとの交際（love affair）に費やされる。そのため、これが例の定説に反して十二世紀以前にも男女の情熱的な恋愛が存在したことの証拠だとして引かれることが時々ある。たしかに『アエネーイス』第四巻にはこの英雄に対するディードーの情熱的な恋心が描かれてはいる。実際、この巻はディードーについての次のような描写で始まる。

だが女王は、だいぶ前から、ひどい恋慕の情で心を痛めていて、血管で傷を養い、盲目の炎に捕らえられている。何度も、あの男〔アエネーアース〕の勇敢さと生まれの高貴さが心中に去来する。胸中に印せられた面立ちと言葉とがずっと残っていて、その思いは五体の眠りに安らぎを与えない（1-5行）⁽⁶⁾。

とはいえ、この第四巻のエピソード全体が語っているのは恋^{エロース}についてではなく、ローマ建国というアエネーアースの仕事を恋が妨げるのは許されないということである。そして特徴的なことに、ディードーのアエネーアースへの愛情は、何よりも災厄として提示されている。

恋に狂える者に神への誓いが何の役に立とうか、神の社が何の役に立とうか。その間、焔が柔らかい髓を貪り、傷が心中で息をひそめて生きている。不幸なディードーは、燃えていて、都を狂ってさまよい歩く、さながらそれは射抜かれた雌鹿のよう。（65-69行）⁽⁷⁾

68行の「不幸なディードー（infelix Dido）」は泉井訳では「呪われたディードー」となっている⁽⁸⁾。infelixであるのはディードーのみではなくて、彼女にかかわりをもつ人にとってもそうだと読める。そしてディードーは恋

に「燃えている (uritur)」のであり、第四巻を通して「炎」のイメージが積み重ねられる。だが、注意したいが、相手のアエネーアースの方は、恋の病にかかって熱を出してなどいない。その点で古代英雄叙事詩の約束事から一步も外れていないのである。そもそも古典世界では「恋の病」なるものは文字どおり悪しき病気なのであって、それは主として女性がかかるものとみなされていた。また、古代ギリシアの公的な文学表現（とくに悲劇）において、女性は社会の合理的秩序を乱す存在として描かれた。クリュタイメストラ、メーデイア、パイドラといった女性は、アテーナイの婦人にふさわしいとみなされた受動的態度はまったく見られないが、それもそのはず、このヒロインたちはいずれも異邦人なのだった。これらの女性は伝統的に激情の奴隷として描かれ、これに恋した者は、誰であれ、不幸に陥った⁹⁾。

『アエネーアース』では、漂流の果てに心身消耗した英雄とその一行を歓待し、静養させるために母親ウェヌスがディードーの恋心をかき立てる。その後、アエネーアースに敵意をもつ女神ユーノーの企み（ローマ建国の仕事を妨げようとの策略）により、女王一行が狩に出かけたときに嵐が起り、たまたま洞窟で二人きりの雨宿りとなった機会に、英雄は女王の求愛を受け入れ、二人は契りを交わす。

それは死への最初の日、最初に不幸の原因となるものだった。というのもディードーは、世間体にも噂にも動かされず、^{アモル}恋が秘密であることも考えぬので。彼女はそれを結婚と呼び、その名でもって罪を覆い隠す。
(169-172行)¹⁰⁾

そうしてしばらく二人の同棲が続き、アエネーアースがカルターゴーに永住するかに見えたが、ユピテルが使者メルクリウスを英雄のもとに遣わし、「自分の王国と事業を忘却してしまった者よ」(267行)¹¹⁾と叱って、彼に本来の使命を思い出させる。一刻も早くカルターゴーを発ってイタリアの地に向かうように命令して、メルクリウスは翼のあるサンダルで飛び去ってゆく。

だが実にアエネーアースはその [メルクリウスの] 姿に驚いて口も聞けなくなり、髪は恐怖に逆立ち、喉もとで声が止まる。神々のこれほどの

ディードーの愛し方

警告と命令に驚き、この甘美な土地から逃げよう、立ち去ろうという思いに、かき立てられる。ああ、どうしよう。燃える女王に、今や、あえてどんな言葉をかけるべきか。何と言って口火を切るか。思いは千々に乱れ、あらゆる事柄を思っで迷う。(280-86行)⁽¹²⁾

このあたりの描写は、英雄の方にディードーへの情が移ってしまっていることを伝え、ある種の葛藤に陥っていることを伝える。だが、これは本来の二者択一に悩む葛藤ではない。この英雄にとって仕事を選ぶのは当然のことだからだ。

船出の噂を聞いて、ディードーは「狂乱状態になり、身を焦がして町中をバッコスの信女のように歩き回る」(300-301行)⁽¹³⁾。またこう言って必死に男に翻意を促す。

「裏切者よ、あなたはこれほどの非情な仕打ちを隠し通して、私の土地からそっと出ていけるなどと思っていらしたか。あなたを、私の愛も、かつて与えられた右手〔誓い〕も、残酷な最期を遂げんとするディードーも、引き留められぬのか。」(304-8行)⁽¹⁴⁾

そう言っで、自殺をほのめかしてまで英雄を引き留めようとするが、彼の方は、「女王よ、私はあなたが言葉によって列挙することのできた非常に多くの事柄に値するものであることを決して否定しません」(333-5行)⁽¹⁵⁾と言い、自分に尽くしてくれたこれまでの親切に感謝の意を表しつつも、二人は正式に結婚したわけではないこと(338行)、またトロイアが滅んだ今、イタリアの地に新しい国家を建設することが自分の使命であること(345行以下)を語り、「みづから欲してではなく、私はイタリアに向かうのです」(361行)⁽¹⁶⁾と、ディードーの説得につとめる。このあたりの対話は、ディードーが感情的な言葉を連ねるのに対して、アエネアースは理性的で淡々としており、非常に対照的である。そして、男の決意を曲げることはできぬと観念したディードーはたっぷりと怨言を放って別れる。「敬虔なアエネアース (pius Aeneas)」(393行)は、彼女に同情し、「大きな愛で心をゆすぶられていた」(395行)のだが、結局は「神々の命令に従い、船隊に戻って

ゆく」(393-6行)⁽¹⁷⁾。

こうしてアエネアースはディードーを捨て、カルターゴーを後にし、すでに見たように、残されたディードーは絶望してみずからのために火葬壇を作らせ、短剣(アエネアースから贈られた品)で胸を刺した上で燃え盛る炎のなかに身を投じる。アエネアースが船出した直後に自害したので、その詳細を彼は知らずにいる。だが、沖合いからカルターゴーを振り返ると、遠く火が見える。それが何を意味するかを察して、アエネアースとその一行は胸をしめつけられるのである(第五巻1-7行)。

さて、ディードーの最期の描写は哀れを催すものであるが、すでに見たように、ローマ建国という英雄の仕事の妨げとなる以上、女王の愛は断念しなければならない。そうすることによって英雄の人格が損なわれることなどまったくくない。ディードーの台詞のなかで英雄への恨み言がたっぷり出てくるのであっても、語り手がその点に関して英雄をそしめる箇所は一つもない。ディードーを捨てて自殺に至らしめても、彼はあくまで「敬虔なアエネアース(pius Aeneas)」と呼ばれ、ローマ建国の父として敬われるのだ。彼がディードーの願いをいれてカルターゴーに留まっていたら、叙事詩はなりたたなくなるのである。

IV オウィディウスのディードー

古代ローマ文学でディードーを扱ったものとして、もう一つ取り上げておくべきなのがオウィディウス(Ovidius, 前43-後17頃)の『ヘーローイデス』(*Heroides*)である。これはオウィディウスの30代前半の作で、エレゲイア詩型による書簡体の詩である。内容は神話伝説に登場する名高い女性(herois)たちが恋人や夫に書き送ったという想定で書かれた書簡である。その中にディードーによるアエネアース宛の手紙が入っている。オウィディウスがこれを書いたとき(前10年前後)はウェルギリウスの没後十年ほどを経ていた。すでに『アエネーイス』に描かれたディードーの物語が流布していたと思われ、オウィディウスは明らかにそのプロットを踏まえている。書簡体であることから、当然語りの視点は英雄に捨てられようとしているディードー一人の視点ということになる。したがって、ここではアエネアースの

ディードーの愛し方

使命は後景に退き（ローマ建国の大義を彼女は共有していないわけだからそうなるのは当然である）、彼女の情熱（アモル）が前面に押し出される。簡単に言えば、『アエネーイス』第四巻に出てくるアエネーアースとディードーのダイアログから、後者の主張だけを取り出して強調してみせたものといってよいだろう。手紙の結びの部分で彼女はこう言う。

ただ、愛したというほかに、どんな罪が私にあるというのですか。……もしあなたが、私を妻として恥じるなら、花嫁でなく、他国の女とも呼ばれましょう。あなたのものである限り、ディードーはどんな名で呼ばれても構いません。……これまで受けたその上に、なおもいくばくかあなたから受けられるとしたら、その恩恵にかけて、また、私のはかない結婚の望みにかけて、どうかしばらく待って下さい。やがては海もしずまり、愛もしずまり、時の経つのに慣れて、悲しみに堪えることも覚えるでしょうから。

もし駄目なら、私はいのちを絶つ覚悟です。あなたも私に対して、いつまでも冷酷でいられるはずがありません。せめて、これを書いている私の姿が眼に入ったら！ 書いている私の膝には、トロイアの剣が置いてあるのです。抜かれた刀身に、頬を伝って涙がこぼれています。もう直ぐそれは、涙の代りに血で染められましょう。あなたのこの贈物は、私の運命になんとふさわしい品でしょうか！ わずかばかりの費用で、あなたは私を葬ってくれるわけです。また私の胸は今始めて、弓矢の傷を受けるわけではありません、そこにはすでに、はげしい愛の痛手があるのです。妹アンナよ！ 私の罪の哀れな共犯者よ！ はやく私の遺骨に最後の香油を注いでおくれ、そして、もがり火で焼いたなら、「シュカイオスの妻——エリッサ」とは銘るさず、大理石の墓の上には、二行の詩をこう刻んでおくれ——

「死の原因と剣とを与えしはアエネーアース。

ディードー、自らの手をば加えて、はかなくなりぬ」⁽¹⁸⁾

オウィディウスはみずからを「やさしき恋の戯れ人」⁽¹⁹⁾と称しているだけあり、恋するものの心理や生態を歌うことにかけては、古今にたぐいなき名

手だった。その技がここでも発揮されているといえよう。ただし、そこでの「恋」^{アモル}とはあくまで官能愛にほかならず、一千年以上を経た中世後期のヨーロッパ世界にあらわれる「恋愛」とはあくまで異質なものである。

ところが、その中世後期のヨーロッパの詩人たちは、この「やさしき恋の戯れ人」が歌う「恋」の内容から官能的（あるいは肉欲的な）要素を極力抜き去って、霊的・精神的な「恋愛」を歌う詩人として彼を讃仰したのだった。これがいわゆる「誤解されたオウィディウス」の問題である。それがあって、オウィディウスはウェルギリウスに劣らずに中世詩人たちの手本にされたのである⁽²⁰⁾。

こうして、この二人に言及したところで、中世後期に描かれたディードー像をようやく見ることができる。

V ロマンズ『エネアス』

『ロランの歌』(*La Chanson de Roland*, 1050 頃) を筆頭とするフランス中世の武勲詩 (*chansons de geste*) は戦士としての男を理想化していて、その点は『アエネーイス』と同様である。それに対して十二世紀にフランスに現れた一連のロマンスは、きわめて異質の文学ジャンルであり、しかもそれがあまりにも短期間のうちに出現したものだから、この文化的な飛躍に驚かずにはいられない。とはいえ、その溝を生める連結点がないわけではない。その一つがフランス語韻文による『エネアス』(*Eneas*)⁽²¹⁾ である。これは1160年頃ノルマンの逸名の聖職者の手になる。大まかにいってこれは『アエネーイス』の翻案といってよく、作者は常時ウェルギリウスのテキストを参照していたと思われる。したがって、『エネアス』は「武勲詩」の部類に入るものといえる。だが、原典の翻案にあたって、著者は中世世界に浸透し始めていた恋愛の観念を導入することもできた。その結果、『エネアス』は『アエネーイス』の単なる翻訳以上の個性を備えた作品となった。それは西歐世界における愛のメンタリティーの一展開を示すものといえる。後続のディードーの物語と同様に、そこにもウェルギリウスの影響が強く残っている。しかし同時に、ディードー像の変容も見られる。

『エネアス』が『アエネーイス』と異なるのは、ラテン語詩からフランス

ディードーの愛し方

語の詩への変化に伴って、新たな言説のモードが示されている点である。このノルマン人の作者にとって、帝国としてのローマの栄光はさほどの意味を有しない。それは主として叙事詩を書く申し訳程度のものにすぎない。ローマ建国の偉業がウェルギリウスにおけるような神聖さをもはや帯びていないのである。そのような形而上的含意を失って、アエネアースの運命は今や別の力によって、すなわち恋愛によって相殺される。かくして、ディードーの挿話が単なる幕間以上のものとなる。ウェルギリウスではディードーの悲劇であるものが、ここではディドン（Didon、『エネアス』でのディードーの表記）とエネアスの不幸な情事に変貌している。それだけでなく、作者は1600行余りを加筆し、そこでエネアスとラヴィヌ（ウェルギリウスにおけるラウィーニアに相当）との宮廷風恋愛、そして結婚を描いたのだった。

『エネアス』を当世風のものにするにあたり、この十二世紀の修道僧はウェルギリウスを転倒させて、かつて公的であったものを私的なものにしていく。単なる狂気とみなされたものが今や新しい次元を獲得している。そのために、エネアスは聖なる使命を喪失している。彼の行動力は、もはや神に比すべきものとは見えなくなっている。例の洞窟での雨宿りの場面はここでは次のように描かれる。

ここにいるは二人きり。彼〔エネアス〕は望むことを彼女〔ディドン〕とする。大した力は要しない。女王も抵抗はしない。彼女は意のままになった。というのも彼のことをずっと欲していたので。今や愛が証される。夫の死以来この貴婦人が恥べきことをしたことはなかった。二人はカルタージュ〔カルターゴー〕に戻る。彼女は喜色満面、それを隠そうともせず、幸福に満ちている。自分は彼の妻になると言い、彼女の過ちを覆い隠す。(1521-35行)⁽²²⁾

ここではウェルギリウスの原典に書かれているのは最後の2行だけであって、後の情事の詳細の記述は加筆である。恋の心理については古代世界では概して無関心であったのに、この時代に至ってその方面の関心が生じていることがここに見てとれる。別れ話のくだりでは、エネアスは神々の意向により、カルタージュを去らねばならぬこと、それは自分の意に反するものであ

ることを強調する。

「私はあなたを決して忘れないでしょう。一生忘れません。私は他の誰よりもあなたを愛するでしょう。この国を離れるにせよ、それは断じて自分のためなのではありません。お嘆きをおやめください、嘆いても仕方なく、私に苦痛を与え、あなたを苦しめるだけなのですから。」
(1781-90行)⁽²³⁾

「私は他の誰よりもあなたを愛するでしょう」と、この十二世紀の修道士はエネアスに語らせているのであるが、これはウェルギリウスがまちがってアエネーアースに語らせたりはしなかった言葉である。

古代と同様に、中世版においてもディードーとアエネーアースの関係はプロットの要請によって不幸な結末を迎えなければならない。だが、この時代に生じているアモルの観念の変化がこの『エネアス』にも反映されていて、恋よりも仕事が優先されるという古代での了解事項がもはや当然のものではなくなっている。エネアスがカルタージュを去る上述の理由が今一つ説得力に欠けるものとなってしまっているのはそのためである。物語の後半部分で、エネアスとラヴィヌのラヴ・ロマンスを新たに導入しているのは、あたかもその欠点を補うためであるかのようだ。

ウェルギリウスでは、アエネーアースがイタリアに行き、ラティヌス王の娘ラウィーニアと結婚するのは政治的配慮によってである。そこにはいかなる類の恋愛感情も存在しない。だが『エネアス』では別の要素が入ってくる。つまりそこには宮廷風恋愛に近い感情が表現されているのである。アルベール・ポフィレが言うように、『エネアス』の作者は、「自分の主人公はかくして不首尾に終わったカルタゴでの冒険以外の恋の冒険を経験しなかったと考え、愛が何の役割をもたない純然たる政略的な結婚で活動の幕を閉じるのは、物語の主人公にふさわしくないと判断した。そこで彼は『アエネーアース』の枠外に、ウェルギリウスの無視した物語風な挿話を作り上げた」⁽²⁴⁾。かくしてラヴィヌは塔からエネアスの姿を見て、恋におちる。翌日、彼女は射手に命じて恋文を結わえた矢を放たせ、その翌日には二人は合図によって互いの気持ちを確認しあう。そしてこの二人の恋はハッピーエンドを迎えるのであ

ディードーの愛し方

る。その際、ディドンについてエネアスはこう言う。

「もし私が、これほどの想い [ラヴィヌスへの恋心] を、カルタージュの女王にいただいていたら (彼女は私を愛しすぎたあまり、愛ゆえに自害したのでしたが)、私の心が彼女から離れることはなかったでしょう。」
(9039-42行)⁽²⁵⁾

言い換えるなら、ディドン (ディードー) に対する愛情が十分に強いものではなかったから、予定通りローマ建国という仕事に再度着手したのであり、もしもそれが「まことの愛」であったのなら、仕事は放棄したいだろう、ということになる。この観点が打ち出されたことによって、ディードーの物語はウェルギリウスの路線から大きく外れたといえる。この路線変更を一層押し進めたのが、次に見るイギリスの詩人ジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer, 1340?-1400) である。

VI チョーサーのディードー

チョーサーは『名声の館』(*The House of Fame*, 1372-80頃) と『善女伝』(*The Legend of Good Women*, 1380-86の間) でディードーを取り上げている。それらにおいて新たなディードー像が提示された。

『名声の館』はチョーサーへのイタリア文学の影響を示す最初の作品とされる。この夢物語のなかで、「作者」は驚つかまれて空を飛び「名声の館」と「噂の館」に連れていかれる。ディードーが言及されるのは前者の「名声の館」(そこでは地上の名声や悪評がすべて聞こえる) においてである。おなじく夢物語の形式をもつ『善女伝』では、「プロローグ」でチョーサー自身がひなぎくの花にかこまれて花園に眠っている。彼の夢のなかに、愛神 (the god of Love) が女王アルセスととともに現れる。愛神は、少し前にチョーサーが『トロイルスとクリセイデ』を書き、そこでクリセイデがトロイルスを裏切った物語を書いたことを責める。女王の取りなしで、チョーサーは恋に忠実だった「善女」たちの物語を書くことになる。そこで出てくるのは、クレオパトラ、ティスベ、メーデイア、フィロメラといった女性たち

であり、その一人がディードーなのである。それら二つのテキストにおいて、ディードーの物語についてのチョーサーの視点は一定している。それを要約したのが『名声の館』の次の詩行である。

ああ、内実が虚偽であるとき、見せかけは何という害をなすことであるか。というのも彼は彼女に対する裏切者だったからである。そのために、ああ、彼女は自害してしまったのだ。見よ、女性が自分の知らぬ男を恋してしまって、何という過ちを犯してしまうことか。本当に、これが世の常なのだが、「輝くものすべてが黄金とは限らぬ」のだ。(第一部、265-69行)⁽²⁶⁾

『善女伝』の「カルターゴの女王ディードー伝」でも、エネアスは恋する者に値しないと断罪されている。例の洞窟での雨宿りの場はこう描写される。

ここで彼ら二人の間に深い情熱が生じた。これは彼女の喜びの最初の朝、彼女の悲しみの始まりだった。というのも、エネアスは低くひざまずき、自分はおなたを心から愛している、決して別の人に気持ちが移ったりはしない、と、偽りの恋人が常に装うごとく、そう誓ったので、無邪気なディードーは彼の心の痛みを哀れと思い、彼を夫とみなし、命の限り永久にと、彼の妻となったのだ。(1229-39行)⁽²⁷⁾

別れ話のくだりでは、エネアスの神聖な使命にはまったく言及しないで、チョーサーはエネアスに夢の話をさせる。その夢でマーキュリー（メルキュリウス）と父の霊が出てきてイタリアにむけて出立するようにいったのだという。

「ですから、私の心は[別れの悲しみで] 破裂しそうです」そう言って彼の空涙があふれでて、両腕に彼女を抱きしめた。(1300-2行)⁽²⁸⁾

「空涙」(false teres) とあることからわかるように、語り手はエネアスの

申し訳を偽りだとしている。ディードー自身も疑っている。その証拠に彼女は、「本心なのですか？ 本当にそうなのですか？」(1302行)⁽²⁹⁾と聞くのだ。ここではエネアスはもはや英雄でもなければまともな恋人でもなくなっている。

チョーサーは『善女伝』でのディードー伝の素材をウェルギリウスとオウィディウスの両方から得ていると断っている。ディードーを中心にすえ、彼女の受苦に焦点をあわせている点では『ヘーローイデス』を踏襲しており、その点でウェルギリウスよりオウィディウスに近いといえる。実際、この話の最後は彼女が手紙を書いたことを伝え、その一部を紹介してから、「全文を読みたい方は、どうかオウィディウスを当たっていただきたい」⁽³⁰⁾という言葉で結んでいるのである。とはいえ、これは重大な相違点であるのだが、古代のオウィディウスはアエネアースを悪党として描きはしなかったのである。ましてや、漁色家として扱っているのでもない。オウィディウスにとっては、アエネアースは何かの理由で去っていった男、この女性が恋人として慕い続ける普通の男性なのである。だから彼女は恋する男に切々と手紙をつづるのだ。その手紙のなかで女が男の不実をとがめる言葉があっても、作者のオウィディウスが彼に罪科があるとみなしているわけではない。『ヘーローイデス』ではディードー自身がこう言っている。「でも、あの人からいくらあしざまに思われても、私はアエネアースを憎めない、彼の不実を嘆き、嘆きながらに想いはいよいよつのるばかり」⁽³¹⁾と。

チョーサーにおいてディードーは非類なく善良で美しい女性となった。このように、彼女が「ヒロイン」になるためには、オウィディウスがあざ笑った類の愛(恋愛)を経験しなければならなかったのである。それこそが「十二世紀の発明」である恋愛、人間の活動のいかなる分野よりも優先されるべきであるとされる、霊的な愛の観念なのだった。

Ⅶ むすびに——エリッサからエリスへ

1890年代に日本で流行した恋愛という語は今述べたディードー像の展開における最終局面に結びつく。

古代ギリシア・ローマの時代において、女性は男性よりも一段劣った存在

とされ、その後の中世のキリスト教西欧世界でも女性は男性によって蔑視され、憎悪されもした。それが中世後期に至って初めて精神的な愛の対象となり、男性よりも高い地位におかれて崇拜の対象にさえなった。すなわち宮廷風恋愛の観念である。その端緒がプロヴァンスで花開いたトゥルバドール (Troubadour) たちの歌で、彼ら詩人たちが「まことの愛」の観念を西欧世界に定着させた。その影響は一方で北フランスに及んでロマンス作品に浸透し、その一方でイタリアにも及んだ。その後の文学的展開からすれば後者のイタリアへの影響の方が重要かと思われる。というのもシチリア経由でイタリアに入り込んだ「まことの愛」(fin'amor) の観念は十三世紀後半に至ってグイニツェッリ (Guido Guinizelli, c.1084-1137) やカヴァルカンティ (Guido Cavalcanti, c. 1250-1300) をはじめとする北イタリアの清新体派の詩人たちに継承され、かつ変容をこうむって、ダンテ (Dante Alighieri, 1265-1321) の『新生』(Vita nuova, 1293) を生み出す契機となったからである。この作品と、『神曲』(La Divina Commedia, 1321) において、「まことの愛」は肉体を完全に離脱した精神美への愛となる。そうした精神愛をペトラルカ (Francesco Petrarca, 1304-74) が取り入れ自身のソネット集を形成する。その後のルネサンス期の恋愛詩は、このペトラルカを凡例とした⁽³²⁾。

以上の事柄を思いあわせてみると、鷗外の『舞姫』はアエネーアースとディードーの物語を連想させる部分が少なからずある。「普請中」の近代日本国家の建設に与するべく、官命を受けた大田豊太郎は、ローマ建国の天命を負ったアエネーアースの一ヴァリエーションと読める。そのベルリン留学中に一人の「舞姫」と恋仲になるが、国家建設の大仕事を取るか、私的な恋愛を取るかという二者択一を迫られて、結局前者を選んだのだった。そしてこのエリス (Elis) という名前も、おそらく偶然であるとはいえ、奇妙な符合がある。というのも、ディードーの別名はエリッサ (Elissa) なのであって、ウェルギリウスの『アエネーイス』においてもこの名が頻繁に使われているからである。公的な仕事の犠牲になって、恋する男に捨てられた点では、これまで見てきた様々なディードーたちと同類なのであり、その点でエリッサは鷗外のエリスとぴったり重なるのである。

ところで、最初にふれた石橋忍月の「舞姫」批判への反論のなかで、鷗外

は主人公の大田豊太郎について次のように述べている。

謫天情仙は嘗て此記を評して云く。大田は真の愛を知らぬものなりと。僕は此言を以て舞姫評中の雋語となす。舞姫を読みてこゝに思到らざるものは、猶情を解すること浅き人なり。……大田生は真の愛を知らず。然れども猶真に愛すべき人に逢はむ日には真に之を愛すべき人物なり⁽³³⁾。

石橋忍月に「功名を捨てて恋愛を取る」べきだと批判された鷗外は、ここで「大田は実は真の愛を知らないのである」という別の評者（謫天情仙）の指摘を盾にして自作品を弁護している。エリスは大田にとって「真に愛すべき人」ではなかった、それゆえこのケースでは「功名」を取ったことは十分に正当化される、というわけである。このくだりは、まさにこの時期に日本に輸入されつつあった「恋愛」の観念を鷗外が自分なりに取り込もうとしていることがうかがえる言葉であるといえよう。とはいえ、鷗外は、その後の長い創作期間を通して、主人公が「真に愛すべき人に逢」う恋愛物語など描きはしなかった。その事実を思いあわせてみると、「真の愛」云々の鷗外の言葉は、相当に無理をしているような気がしないでもない。

《注》

- (1) 『石橋忍月全集』全5巻、八木書店、1995年、第3巻、121頁。この評に対して鷗外は「相澤謙吉」の署名で「気取反之丞に與ふる書」と題して『しがらみ草紙』第7号（明治23年4月）に反論を掲載した（『鷗外全集』全38巻、岩波書店、第28巻、158-64頁）。その後同年の5月までに双方の間で激しいやりとりがあった。
- (2) 柳父章『翻訳語成立事情』岩波新書、1982年、89-91頁。
- (3) 同書、92-3頁。
- (4) “L’amour? C’est une invention du douzième siècle.” 以下を参照。Maurice Valency, *In Praise of Love: an Introduction to the Love-Poetry of the Renaissance*, New York: Macmillan, 1958: rpt. Octagon Books, 1975, p.1. モーリス・ヴァレンシー『恋愛礼讃』杏掛良彦・川端康雄訳、法政大学出版局、1995年、1頁。
- (5) “Dido, legendary daughter of a king of Tyre, known by Virgil as Belus; she is said to have had the name of Elissa at Tyre, and to have been called Dido (? ‘The Wanderer’) at Carthage. Her husband, called Sychaeus by Virgil, was murdered by her brother Pygmalion, now king of Tyre, and

Dido, escaping with some followers to Libya, there founded Carthage. At this point legends diverge. The older story, narrated by Timaeus, was that in order to escape marriage with the king of Libya (Iarbas in Virgil) Dido built a pyre as though for an offering and leapt into the flames. The Roman form of the story, which gained currency at the time of the Punic Wars and was probably followed by Naevius and Ennius, brought Aeneas to Carthage, but Varro, who adopts it, makes Dido's sister Anna, not Dido herself, perish for love of Aeneas. The story contained in the first and fourth books of the Aeneid may have been invented by Virgil himself. Aeneas, shipwrecked on the coast of Libya, is brought by Venus to the palace and entertained by Dido, who falls in love with him. After a while Aeneas departs, warned by Mercurius to leave Carthage and pursue his destiny, and Dido throws herself on the pyre. Ovid in *Heroides* 7 presents Dido's lamentation in a rhetorical form. Modern sentiment has reviled Aeneas' treatment of Dido, but his desertion of her in obedience to divine command is an essential element in his 'piety.'" N. G. L. Hammond and H. H. Scullard (eds.), *The Oxford Classical Dictionary*, 2nd ed., Oxford U. P., 1970, p. 340. なお、この項の執筆は Syril Bailey による。

- (6) "At regina, gravi iam dudum saucia cura/
vulnus alit venis et caeco
carpitur igni./ multa viri virtus animo multusque recursat/ gentis honos:
haerent infixi pectore vultus/ verbaque, nec placidam membris dat cura
quietem." (*Aeneis*, IV, ll.1-5.) 『アエネーイス』第四巻の本文の引用には、以下のテキストを使用した。P. Vergili Maronis *Aeneidos Liber Quartus*, edited with a commentary by R. G. Austin, Oxford U. P., 1955, rpt. 1988.
- (7) "quid vota furente,/ quid delubra iuvant? est mollis flamma medullas/
interea et tacitum vivit sub pectore vulnus./ uritur infelix Dido totaque
vagatur/ urbe furens, qualis coniecta cerva sagitta..." (*Ibid.*, ll. 65-69.)
- (8) ウェルギリウス『アエネーイス』上下, 泉井久之助訳, 岩波文庫, 1976年, 上巻, 211頁。
- (9) Cf. Valency, *op. cit.*, pp. 6ff. ヴァレンシー, 前掲書, 7頁以下。一例をあげると、コルキスの女王メーディアは金羊毛を求めてやって来た英雄イアーソンを一目見て、恋におちる。それはもちろんエロス(愛神)のしわざである。アポロネオスの『アルゴナウティカ』にこう書かれている。
「かれ [エロス] は戸口のまぐさの下ですばやく弓を張り、／一度も使っていない、苦痛に満ちた矢をえびらから抜きとると、／四方に鋭い目をくばりつつひそかに急ぎ足で／敷居をまたいだ。それからアイソンの子 [イアーソン] のすぐ足もとに／低くうづくまり、矢はずを弦の中ほどに当て、／両手で弓を引きしぼり、メーディアにまっすぐ狙いを定め、／矢を放った。乙女は心を奪われて口がきけなくなった。／エロスは高い屋根の広間から高笑いしながら／外へとび出した。矢は深く乙女の胸の中で／炎のように燃えた。彼女はきらきら光る眼を／アイソンの子に向かってたえず投げ、／理性は苦痛に揺れて

ディードーの愛し方

胸の外に追われた。彼女はほかに何も考えず、／魂は甘い苦悩にあふれた。／さながら、糸をつむぐ手間かせぎの女が／早々と起き、まだ夜中に屋根の下にあかりをとすため、／くすぶる燃えさしからすさまじい炎が起り、／小枝をことごとく灰にするよう——／そのように胸元に恐ろしい恋がうずくまり、／ひそかに燃えた。心は千々に乱れ、やさしい頬は／青ざめるかと思えば、紅に染まった。」(『アルゴナウティカ』第三巻 278-298 行。岡道男訳。『世界文学全集1 ホメロス・アポロニオス』講談社、1982年、513頁。)

「その姿は悩ましい恋の苦しみをもたらした。／心臓は胸からとび出さんばかり、目はぼうとかすみ、／頬は火照って真っ赤に染まった。／膝は力が抜けて前に進むことも後ろに退くこともできず、／足は地面にくぎづけになった。」(同第三巻 962-966 行、533頁。)

ギリシア、ラテンの英雄物語の約束事通りに、愛神エロースが弓の標的にするのは「より弱い性」(the weaker sex)としての女性であり、それに射抜かれた女性は、正常な市民の「黄金の中庸」の対極に立つ、異常な情熱の虜となる。この恋の最終的結末が例のメーディアの子殺しであるのは言うまでもない。このアポロニオスによるメーディアの恋情の描写はウェルギリウスによるディードーの恋情の描写と似た所が多く、ウェルギリウスはかなり多くここから借用していると思われる。ディードーのアエネアースへの恋心も、母親ウェヌスがアモルに命じて矢を射させたことによって生じる。いずれもエロース(アモル)というものを、英雄的な男性が免れている病的情熱ととらえている。そして英雄に対する女性の愛情は、英雄にとって足かせになる場合と、有用な道具になる場合がある。イアーソーンがメーディアの愛を受け入れるのは(といってもメーディアの情熱的愛情を彼はまったく共有しないが)このコルクスの王女が金羊毛の獲得という仕事を果たす上で大いに利用価値があったからだった。二人は結婚して二子をもうけるが、イアーソーンがメーディアを捨ててコリントス王の娘と再婚しようとしたため、メーディアは二人の息子を殺し、相手の女も焼き殺してしまう。

- (10) "ille dies primus leti primusque malorum/ causa fuit; neque enim specie famave movetur/ nec iam furtivum Dido meditatur amorem:/ coniugium vocat, hoc praetexit nomine culpam." (*Aeneis*, IV, ll.169-172.)
- (11) "regni rerumque oblite tuarum!" (*Ibid.*, IV, l.267.)
- (12) "At vero Aeneas aspectu obmutuit amens,/ arrectaeque horrore comae et vox faucibus haesit./ ardet abire fuga dulcisque relinquere terras,/ attonitus tanto monitu imperioque deorum./ heu! quid agat? quo nunc reginam ambire furentem/ audeat affatu? quae prima exordia sumat?/ atque animum nunc huc celerem nunc dividit illuc/ in partesque rapit varias perque omnia versat." (*Ibid.*, IV, ll.280-286.)
- (13) "saevit inops animi totamque incensa per urbem/bacchatur." (*Ibid.*, IV, ll.300-1.)
- (14) "issimulare etiam sperasti, perfide, tantum/ posse nefas tacitusque mea decedere terra?/ nec te noster amor nec te data dextera quondam/ nec

- moritura tenet crudeli funere Dido?” (*Ibid.*, IV, ll.305–8.)
- (15) “ego te, quae plurima fando / enumerare vales, numquam, regina, negabo / promeritam...” (*Ibid.*, IV, ll. 333–5.)
- (16) “Italiam non sponte sequor.” (*Ibid.*, IV, l.361.)
- (17) “pius Aeneas...multa gemens magnoque animum labefactus amore / iussa tamen divum exsequitur classemque revisit.” (*Ibid.*, IV, ll.393–6.)
- (18) “quod crimen dicis praeter amasse meum?... / si pudet uxoris, non nupta, sed hospita dicar; / dum tua sit, Dido quidlibet esse feret... / pro meritis et siqua tibi debemus ultra, / pro spe coniugii tempora parva peto — / dum freta mitescunt et amor, dum tempore et usu / fortiter edisco tristia posse pati. / Si minus, est animus nobis effundere vitam; / in me crudelis non potes esse diu. / adspicias utianam, quae sit scribentis imago! / scribimus, et gremio Troicus ensis adest, / perque genas lacrimae strictum labuntur in ensem, / qui iam pro lacrimis sanguine tinctus erit. / quam bene conveniunt fato tua munera nostro! / instruis impensa nostra sepulcra brevi, / nec mea nunc primum feriuntur pectora telo; / ille locus saevi vulnus amoris habet. / Anna soror, soror Anna, meae male conscia culpa, / iam dabis in cineres ultima dona meos. / nec consumpta rogis inscribar Elissa Sychaei, / hoc tantum in tumuli marmore carmen erit: / PRAEBVIT AENEAS ET CAVSAM MORTIS ET ENSEM; / IPSA SVA DIDO CONCIDIT VSA MANV.” (*Heroides*, VII, ll.164–96 in Ovid, *Heroides and Amores*, with an English Translation by Grant Showerman, second edition, revised by G. P. Goold, the Loeb Classical Library, Harvard U. P., 1977, pp. 94–98.) オウィディウス「名婦の書簡」松本克己訳、『世界文学体系 67 ローマ文学集』1966年、筑摩書房、1966年、325頁。引用はこの松本訳を使用した。
- (19) “tenerorum lusor amorum”, *Tristia*, III, iii, l.73; IV, x, l.1.
- (20) 「誤解されたオウィディウス」(Ovid misunderstood) の問題については、以下を参照。C. S. Lewis, *The Allegory of Love*, Oxford U. P., 1936; rpt. 1977, pp. 5ff. 邦訳 C. S. ルーイス『愛とアレゴリー』玉泉八州男訳、筑摩書房、1972年、7頁以下。
- (21) *Eneas: Roman du XIIe Siècle*, édité par J.-J. Salverda de Grave, Paris: Librairie Honoré Champion, Tome 1, 1985, Tome 2, 1983; *Eneas: a Twelfth-Century French Romance*, translated with an Introduction and Notes by John A. Yunck, New York and London: Columbia University Press, 1974. ディードーの主題の中世以後の展開について、より詳しくは以下を参照。John Watkins, *The Specter of Dido: Spenser and Virgilian Epic*, Yale U. P., 1995, pp. 30–61; Irving Singer, “Erotic Transformations in the Legend of Dido and Aeneas”, *MLN*, 90 (1975), pp. 767–83.
- (22) “Estes les vos andos ansanble, / il fait de li ce que lui sanble, / ne • li fait mie trop grant force, / ne la raïne ne s’estorce, / tot li consent sa volenté; /

- pieca qu'el l'avoit desirré./ Or est descoverte l'amor;/ onc mes puis la mort
 son seinor/ ne fist la dame nul hontage./ Il s'en retornent a Cartage./ Al
 demeine joie molt grant./ nel cela mes ne tant ne quant./ molt s'en faisoit
 lie et joiose;/ ele disoit qu'ele ert s'espose./ ensi covroit sa. felenie..." (*Eneas*,
 ll. 1521-35.)
- (23) "Se nel vos puis gueredoner,/ ge nel porrai mie oblier,/ manbrera m'an
 tant com vivrai,/ sor tote rien vos amerai./ Se ge m'en vois de cest país./
 ce n'est par moi, gel vos plevis./ Laissiez icest compleignemant,/ car vos n'i
 conquerrez noiant,/ fors tant que vos me comovez/ et vos meïsmes
 malmenez." (*Ibid.*, ll.1781-90.)
- (24) アルベール・ポフィレ『中世の遺贈』新倉俊一訳、筑摩書房、1994、105頁。
- (25) "se ge ausse tel corage/ vers la raine de Cartage,/ qui tant m'ama qu'el
 s'en ocist,/ ja mes cuers de li ne partist..." (*Eneas*, ll.9039-42.)
- (26) "Allas! what harm doth apparence,/ Whan hit is fals in existence!/ For he
 to her a traitour was;/ Wherfor she slow hir-self, allas!/ Loo, how a woman
 doth amys/ To love hym that unknowen ys!/ For, be Cryste, lo, thus yt
 fareth:/ 'Hyt is not al gold that glareth.'" (*The House of Fame*, Part 1, ll.265
 -269.) チョーサーの引用はすべて以下のテキストに拠る。Larry D. Benson *et al.*
 (eds.), *The Riverside Chaucer*, third edition, Oxford U. P., 1988.
- (27) "And heer began the depe affeccion/ betwixe hem two; this was the
 firste morwe/ Of hire gladnesse, and gynning of hire sorwe./ For there
 hath Eneas ykneled so,/ And told hire al his herte and al his wo,/ And
 swore so depe to hire to be trewe/ For wel or wo and chaunge hire for no
 newe;/ And as a fals love so wel can pleyne,/ That sely Dido rewede on
 his peyne,/ And tok hym for husbonde and becom his wyf/ For evermo,
 whil that hem laste lyf." (*The Legend of Good women*, Text F, ll.1229-39.)
- (28) "'For which, me thynketh, brosten is myn herte!'/ Therwith his false
 teres out they sterte,/ And taketh hire withinne his armes two." (*Ibid.*,
 ll.1300-2.)
- (29) "'Is that in ernest?' quod she; 'Wole ye so?'" (*Ibid.*, l.1302.)
- (30) "But who wol al this letter have in mynde,/ Rede Ovyde, and in hym he
 shal it fynde." (*Ibid.*, ll.1366-67.) オウィディウスのチョーサーへの影響につ
 いては以下を参照。Helen Cooper, "Chaucer and Ovid: a Question of
 Authority" in Charles Martindale (ed.), *Ovid Renewed: Ovidian Influences
 on Literature and Art from the Middle Ages to the Twentieth Century*, Cam-
 bridge U. P., 1988, pp. 71-81.
- (31) "non tamen Aenean, quamvis male cogitat, odi,/ sed queror infidum
 quetaque peius amo." (*Heroides*, VII, ll. 29-30.) 「名婦の書簡」前掲書、323
 頁。引用はこの松本訳を使用。
- (32) Cf. Valency, *op. cit.*, pp. 270-72. ヴァレンシー、前掲書、390-91頁。
- (33) 森 鷗外「舞姫に就きて気取半之丞に與ふる書」『森鷗外全集』(前掲) 第22

卷, 163 頁。なお, 引用文中の謫天情仙とは漢学者野口寧斎 (1867-1905) の筆名。「此記を評して」とは, 「舞姫」を賞賛した謫天情仙の書評 (「舞姫を讀みて」『しがらみ草紙』明治 23 年 1 月) を指す。

付 記 本論は 1996 年度に実施した十文字女子大学社会情報学部の専任教員 5 名による共同研究「愛の観念の史的展開とその実相について」において口頭発表した論考に加筆訂正を加えたものである。

(1997 年 10 月 31 日受理)

Modes of Dido's Love

Yasuo Kawabata

Abstract

The story of Dido, legendary queen of Carthage in Virgil, who falls madly in love with Aeneas and burns herself to death when he leaves her, stimulated Chaucer and other medieval poets to retell it in their own works. The medieval versions are in stark contrast to the Virgilian one in that they look on Dido's love for Aeneas favourably, reviling instead Aeneas's harsh treatment of her. In the epic of Virgil, on the other hand, it is a matter of course that Aeneas deserts Dido in order to resume his mission (foundation of Rome). In short, where work takes first priority for Virgil, love does for the medieval poets.

Comparing these versions, I have examined different modes of her love and the radical change in the very idea of love reflected in the differences. And I have further investigated the new idea of love flowing into modern Japan, suggesting that the character of Elis, the heroine of Mori Ogai's *Maihime*, can be read as a variant of the legendary queen.